

2024 年度長期留学最終報告書（ゲント大学）

西森心春

はじめに

2024 年 8 月から 2025 年 7 月までベルギーゲント大学の Arts and Philosophy 学部に交換留学をした。留学の目的は大きく次の 4 つであった。

- ① 異文化を理解し尊ぶ姿勢を持って、自他ともに尊重できる人間性を育むこと。
- ② 広い視点で物事を捉え、自分の意見を表現できる人間になること。
- ③ 世界の土俵に立ち、世界各国の人と意見交流ができる人間になること。
- ④ 世界から見た日本の捉え方や現状を知ること、日本が直面している問題について客観的に考えること。

本報告書では、実際に経験した現地での生活や大学の講義の内容などを示しながら、留学によって得た学びや考え方をまとめる。

1. 大学の生活

1-1 講義について

授業時間は単位数によって違うが、基本的に 1 コマ 3 時間である。Arts and Philosophy 学部では、ファッションや言語、様々な国の歴史や文化について学ぶことができる。また、Japanology と呼ばれる日本語学科があるため、日本についても学ぶことができる。

私は、人権に関する講義や英米の政治・社会に関する授業、ファッション、オランダ語、BENELUX（ベルギー・オランダ・ルクセンブルク）の歴史など幅広く興味のある授業を受けた。これらの講義の中でも特に印象に残っているのは、「Society and current affairs; Japan」という日本の文化・社会について包括的に学ぶことができる授業である。

○Society and current affairs: Japan

本講義は、日本の社会や仕組みを学ぶ授業である。日本の社会学者である杉本義男氏の「An Introduction to Japanese Society」という日本の社会がまとめられている本を中心に授業が展開されている。学期の前半は先生による講義だが、後半はグループごとに分かれて講義形式のプレゼンを行う。教育、婚姻制度、食、祭り、安楽死などの中から、気になるテーマを自分で選択し、同じテーマを選んだ人とグループが作られる。各グループには必ず日本人が 1 人は入るように組分けされる。私はベルギーの学生 3 人と共に「安楽死」について、現状や課題について調べて発表した。

現地の学生と 2 か月かけてプレゼンの準備をして発表する過程を通して、日本との違いを実感する瞬間が多々あった。個人的な課題としては、英語でプレゼン準備を行うことの難しさや、英語力、プレゼン力の未熟さが浮き彫りとなった。全体を通しての気づきは、ベルギーの学生はプレゼン後の質問が鋭いということだ。例えば、安楽死についてプレゼンを行った際には、「医師のパターナリズム問題や患者に病名を知らせない現状が背景に

ある」と述べたことに対して、「なぜ日本で問題視されていないのか」という質問や、「終末期に関するガイドラインがあるが利用率が低い」と述べたことに対して「なぜガイドラインがあるのに利用率が低いのか」といった、具体的で率直な質問が来た。ベルギーでは疑問を的確に臆せず発する学生が多いことで、より多角的な視点で議論が発展していることに気づいた。一方で、日本では、プレゼン後に質問を積極的にする人は限られている。質問しやすい環境づくりや教育は日本でも取り入れるべきだと考えた。

その他にも、本講義では日本では気づくことができない視点を吸収することができた。例えば、日本はかつて工業分野を中心に発展してきたが、近年ではアニメ・漫画などのコンテンツ産業を基盤とする「文化資本主義」へとシフトしつつあることを学び、その背景にあるブランディング成功の要因や政府の取り組みを知ることができた。実際に、本講義を受けている現地の生徒は日本に興味関心があり、アニメや文学など日本の文化に良さを見出していた。この学びは、日本が世界の中でどういった役割を担っているのか、そして日本がどう捉えられているのかを考える上で、とても興味深いと感じた。

1-2 学生の勉強量

学部や専攻によって違う可能性はあるが、体感としてベルギーの大学生は日本の大学生に比べて勉強時間が多いと感じた。授業の時間数も長い上に、日々の課題や事前学習の量がとても多い。そのため、前期は日常生活と勉強のバランスが難しく、勉強方法も確立できなかったが、後期はテストのシステムを理解して勉強の方法が定着した。ベルギーの大学生活を通して、自主学習と積極性が身につくシステムであることを体感した。

2. ベルギー社会

2-1 キリスト教文化

生活面で特に印象に残っているのは、宗教だ。ベルギーではキリスト教やイスラム教など日本に比べて多様な宗教を信仰している人が多く、人々の価値観や信条が違うことを目の当たりにした。例えば、ラマダンの期間は SNS で呼びかけて結束している様子が見られたことや、街のお祭りはキリスト教文化に根付いているものが多く、有名な教会や観光地もキリスト文化に基づいているものが多くあった。日本は仏教と神道が大半であるが、宗教観は強くなくクリスマスなどのイベントも混同している。一方で、ヨーロッパは日本に比べて信仰心が強いと感じた。日本に来る前から想像していたが、実際住んでみると想像より遥かにキリスト教について理解する必要があると感じた。

また、歴史を知ることにより文化に対する理解が深まることを実感した。BENELUX の歴史に関する授業では、カトリックとプロテスタントの宗教的対立が 16 世紀のネーデルラントにおける分裂に大きな影響を与えたことを知った。北部ではプロテスタントが優勢となり独立してオランダとして発展した一方、南部はカトリックが支配的であり、後にベルギーとして形成される地域へとつながっていった。このように宗教対立は、国の起源にも深く関わっており、歴史や宗教は人々の生活や異文化を理解する上で重要であると考え

た。

2-2 ベルギー人の性格

ベルギーでは、基本的に知らない人でも目が合った時に微笑む挨拶がある。一方で、留学以前に想像していたフレンドリーな性格とは違い、内気な性格であることも実感した。

日本語学を専攻している人が集まる「Tomo no Kai」の交流イベントに参加した際も、積極的に話しかけてくることはほとんどなく、自分から挨拶しなければ交流が深まらなかった。そして、世界の人々と交流するためには、自信をもって積極的に自分を表現することが重要であると気づいた。

2-3 ベルギーの性差別や性教育

ベルギーは男女平等が進んでおり、ジェンダー多様性や性教育が日本より豊かであることも分かった。男女格差指数は日本が 118 位と低いのに対し、ベルギーは 12 位(2024 年時点)と高水準である。特に教育はほとんど男女の格差がなく整っていると言われている。実際にベルギーの友人と男女格差について議論した際に、「共働きが普通で、両親が家事・育児を協力するのが当たり前だ」と言っていた。日本は未だに昇格の機会や収入、政治参画において格差があり、生活の中でも家事や育児の割合は女性の方が高い。

また、大学の教室内でも髪が長くメイクをしている男性や、男性らしい服装の女性が普通にいて、同性カップルを見かけることもあった。さらに、プライド月間にはブリュッセルに集まってプライド運動を行うなど、LGBTQ+の人権が日本よりも守られていると感じた。

加えて、ベルギーの友人から、ベルギーは性教育がしっかりしており、保険に加入しているとピルが無料であることも教えてもらった。日本では性の話はタブーとされており、無知や認識の歪みによって性犯罪の発見が遅れたり、ピルが欲しくても買えない人がいる。最近では日本版 DBS が成立したことが話題になっていたが、私はベルギーのように学生の時に必要な教育を提供したり医療制度を整えるべきだと考えた。

このように、ベルギーでは男女格差が小さいことや、性の多様性と性教育が進んでいることを実感して、日本でも価値観をアップデートしながら環境や体制を整えていく必要があると実感した。

2-4 ベルギーの政治

ベルギーは公用語がオランダ語、フランス語、ドイツ語である。それに伴い、地域も 3 つに分かれている。オランダ語圏はフランダース地域、フランス語圏はワロン地域であり、首都はブリュッセルで、フランス語とオランダ語が話されている。これらの言語が共存するまでの過程では、言語的対立もあった。そして、言語的対立による政治問題も起こっていた。そのため、ベルギーの現政治体制は日本に比べてとても複雑である。

ベルギーは連邦政府であり、6 つの組織で構成される。

- ① ブリュッセル首都圏地域
- ② フランドル地域

- ③ フロン地域
- ④ フラマン語共同体
- ⑤ フランス語共同体
- ⑥ ドイツ語共同体

これらの組織を合わせた連邦と各地域、各共同体では役割が違う。連邦政府は外交や防衛などの権限を持つが、地域圏政府は住宅、土地、環境などを管轄する。そして、共同体政府は文化や教育、家族に関する政策を担当する（小島, 2010）。

フランドル地域/フラマン語共同体は、経済的に自立可能であることから、ベルギーから独立しようとする運動もあるそうだ。

このように日本とは全く違う政治体制で国が成り立っていることを知ることで、日本は単一民族単一言語であり、民族や文化的価値観が似ているため起こりにくい問題について、多言語国家ではどのように協調しながら発展したのかを理解できた。

2-5 移民と治安

私に関心を抱いたのは、ベルギーの移民問題である。ベルギーは人口の 36%が外国の背景を持っており、そのうち 13.8%は外国人である。移民増加の背景として、ベルギーはかつて産業の発展段階にあった際に多くの移民を労働力として受け入れてきた。そのため現在の移民の割合は世界でも上位である。

移民に関する問題は、雇用問題や差別問題など様々あるが、経済格差も大きいとされており、貧困地域ではドラッグ売買などが横行している。そして、犯罪や治安の懸念が強いとされている。実際に留学中にも、在ベルギー日本大使館から「銃殺事件が起こり、犯人が逃走している」というお知らせや、「邦人が暴行や窃盗に遭った」という情報が送られてきていた。ベルギー人もブリュッセルは犯罪や移民が多く、特に治安が悪い地域であると教えてくれた。

日本は島国で他民族と物理的にも離れているため、移民が問題になることは少なかったが、現在日本は少子高齢化で、労働力として移民や外国人を受け入れる問題に直面している。しかし、前述したような危惧される問題もあるため、外国人の受け入れと日本の伝統や治安を守ることのバランスについて、他国の先行例も踏まえて十分に考える必要があると考えた。

3. ベルギーの生活

3-1 ストライキ

ベルギーの生活の中で特に印象に残っているのは、ストライキの多さである。私はゲントから電車で 30 分のブリュージュの寮で暮らしていたため、電車通学だったが月に一回ほどの頻度でストライキが起こり、電車が遅れることや本数が減ることが頻繁にあった。ストライキの背景には、政府に対して給与や年金の引き上げを求めるといった意図があり、労働者の権利を主張し、実際に行動する文化が強いことを実感した。

3-2 異文化交流

ゲント大学は留学生の受け入れが多い。Erasmus 制度により EU 圏内の留学が活発であることに加え、日本を含むアジアやアフリカからも受け入れている。そのため、国際交流イベントが多くあった。例えば、各国の伝統料理を持ち寄って食べるイベントなどがあった。寮にも中国人やオランダ人、スロバキア人が同じフロアにおり、日常の中で文化交流ができ、刺激的な日常だった。ゲント大学はベルギーやヨーロッパの中でも規模が大きくレベルが高い大学であるため、留学生も各国のトップレベルの大学から来ていた。そのため、専門的で学術的な英語が必要であり、コミュニケーションが難しい場面もあったが、学部を超えて、様々な分野で活躍している人と交流することで、日本では経験できない学びを得た。

3-3 休日

EU 圏内は電車やバスで移動しやすいことから、休日は友人とフランスやドイツ、オランダに行く機会もあった。EU の中でも国が違うと言語や文化、歴史、建物や生活が全然違っており、それらの国々が共同体としてまとまっていることが非常に興味深かった。

まとめ

今回の留学では、当初掲げていた目標を達成できたと考える。現地での講義や学生との交流を通じて、自らの意見を表現し、議論に参加する経験を重ねたことで、国際的な場で必要とされる主体性や柔軟な思考力を身につけることができた。また、課題に直面した際にも試行錯誤を重ねながら乗り越える過程で、人間的な成長を実感することができた。

さらに、ベルギーの多様な宗教観やジェンダー平等の姿勢、移民政策や政治体制など、日本とは全く異なる文化や社会のあり方に触れ、異文化を尊重する姿勢が深まった。

加えて、日本についても外から見つめ直す貴重な機会となった。日本の安楽死に関する議論や男女格差の現状などをテーマに現地学生と議論する中で、日本の社会の特性や課題を客観的に捉えることができた。特に、海外からの視点は、自分自身が日本で当たり前と感じていた事柄を再考する機会となり、今後日本が抱える課題をどう解決していくべきかを考える重要な視点であった。

この一年間の留学を通じて得た経験は、自分自身の生き方にも大きな影響であったと確信している。今後も今回の学びを糧に、異文化を尊重しながら自分の考えを発信できる人間として成長していきたい。

参考文献

小島 健「ベルギー連邦制の背景と課題」2010

<https://repository.tku.ac.jp/dspace/bitstream/11150/716/1/keizai265-06.pdf>